

# COVID-19発生前後の グローバルリスクの変容



マーシュブローカージャパン株式会社  
取締役会長  
平賀 暁

本来であれば3月18日のJOI主催のセミナーで、1月に世界経済フォーラムによって発行されたグローバルリスク報告書2020年版の概説をする予定でした。しかしながら、COVID-19（新型コロナウイルス、以降コロナ禍）の発生により、世の中すべてがこの感染症リスクに対峙することになり、残念ながら、最新のグローバルリスクを皆様を紹介する対面でのセミナー機会を逸しました。本稿では、少し見方を変えて、前段では今回のコロナ禍のリスクがどのように世界経済を震撼させてきているのかを紹介し、私たちが対峙しなければならないグローバルリスクについて解説します。後段では、コロナ禍が起きて、押さえておくべきグローバルリスク報告書で紹介されている30のグローバルリスクについて概説します。コロナ禍の影響で私たちはこれらの30のリスクの存在を忘れていますが、企業として対応策を講じなければならないリスクを整理する必要があります。有価証券報告書上に記載する“事業等リスク”がより具体的な記述を内閣府からも求められており、30のリスクを今一度共有することにより、今後のリスク対応策の立案・作成の一助になれば幸いです。

## 1. コロナ禍とリスクの展望

例年、世界経済フォーラムは1月中旬にグローバルリスク報告書を発表し、最新のグローバルリスクの特徴や対応方法を示唆します。しかし、今年の上半期はコロナ禍に関連する新たなリスクが台頭しました。これは誰も予測すらしなかったことでしょう。そのような中、2020年5月19日に世界経済フォーラムは、原題“COVID-19 Risks Outlook: A Preliminary Mapping and Its Implications”（対訳：新型コロナウイルスとリスクの展望：初期マッピングとその意味）を発表しました。チューリッヒ・インシュアランス・グループとマーシュ・アンド・マクレンアンとのパートナーシップのもとで作成されたこの報告書は、350名ほどの

リスクスペシャリストを対象として実施されたアンケート調査によって、今後18カ月間に世界経済およびビジネスに対して、発生する可能性と影響度の両面から、最大の懸念事項の順位付けをしています。図1および2がその上位10位までのリスクを示しています。

### (1) 長引く不況や構造的失業の増加など経済リスクが上位を席捲

図1ならびに2に掲示されている通り、コロナ禍以降、懸念されるリスクとしてその可能性や影響度のどちらも過半数を超えているのが、世界経済の長引く不況（世界的な景気後退の長期化）です。可能性の部類で見ると以下、企業倒産の増加と業界再編の波、そして主要国の産業復興や業績回復の失敗や遅れなど、経済リスクが上位を占めています。一方、影響度の視点から見ると、2番手に高い水準の構造的失業（特に若年層）、そして新型コロナウイルスの新たな集団発生、あるいは新たな感染症の発生が続きます。興味深いリスクとしては、サイバー攻撃やデータの不正利用があげられていることです。これは、コロナ禍の影響で働き方がオンラインなどのリモートワークに変化したことで、パソコンの使用頻度の増加も原因のひとつと考えられます。

### (2) コロナ禍のリスクに立ち向かうための方策

官民連携を含む社会のあらゆるセクターと協力して、増幅するリスクと対峙し、未知のリスクにも対応できるレジリエンスを高めていくことも必要です。サイバー攻撃を受ければサプライチェーンが寸断する恐れもあり、常にリスクが他のリスクに波及することを念頭に置かなければならず、事業中断リスクが潜在化していることを忘れてはいけません。また、働き方が変わることで、従業員の不安やストレスも増加するため、従業

図1 COVID-19（新型コロナウイルス）とリスクの展望 世界中を震撼させる可能性の高いリスク上位10傑

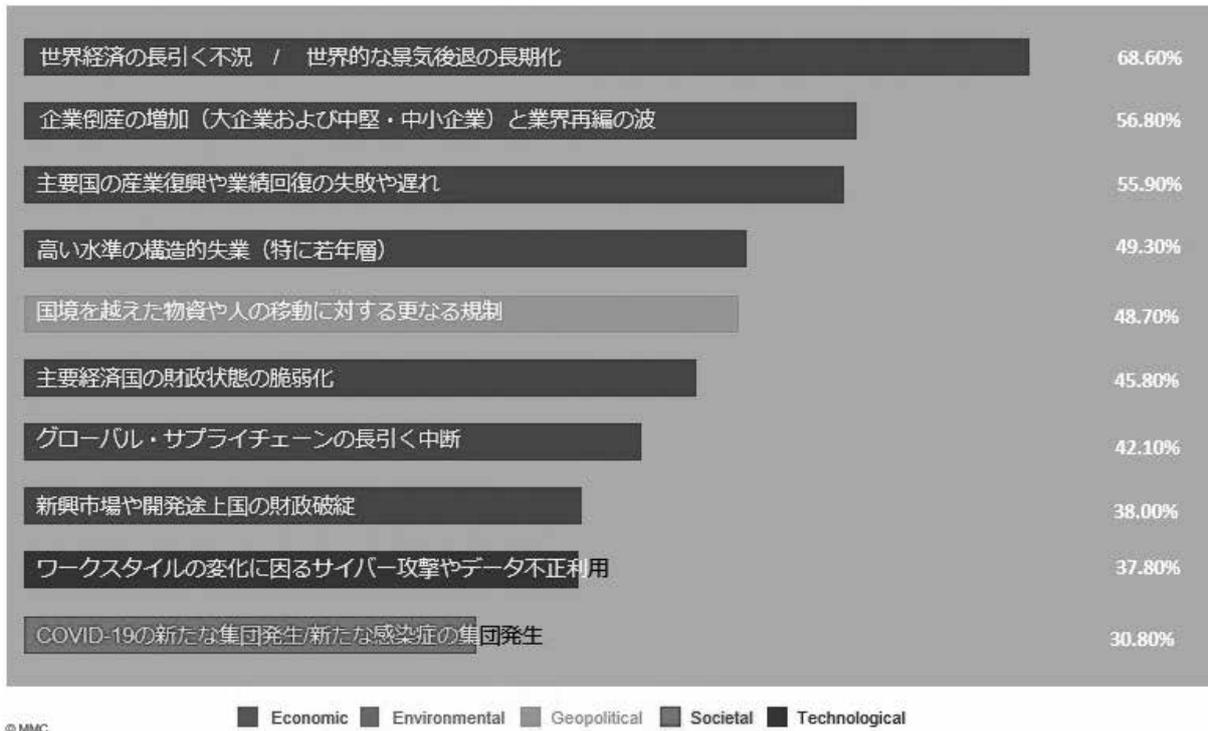
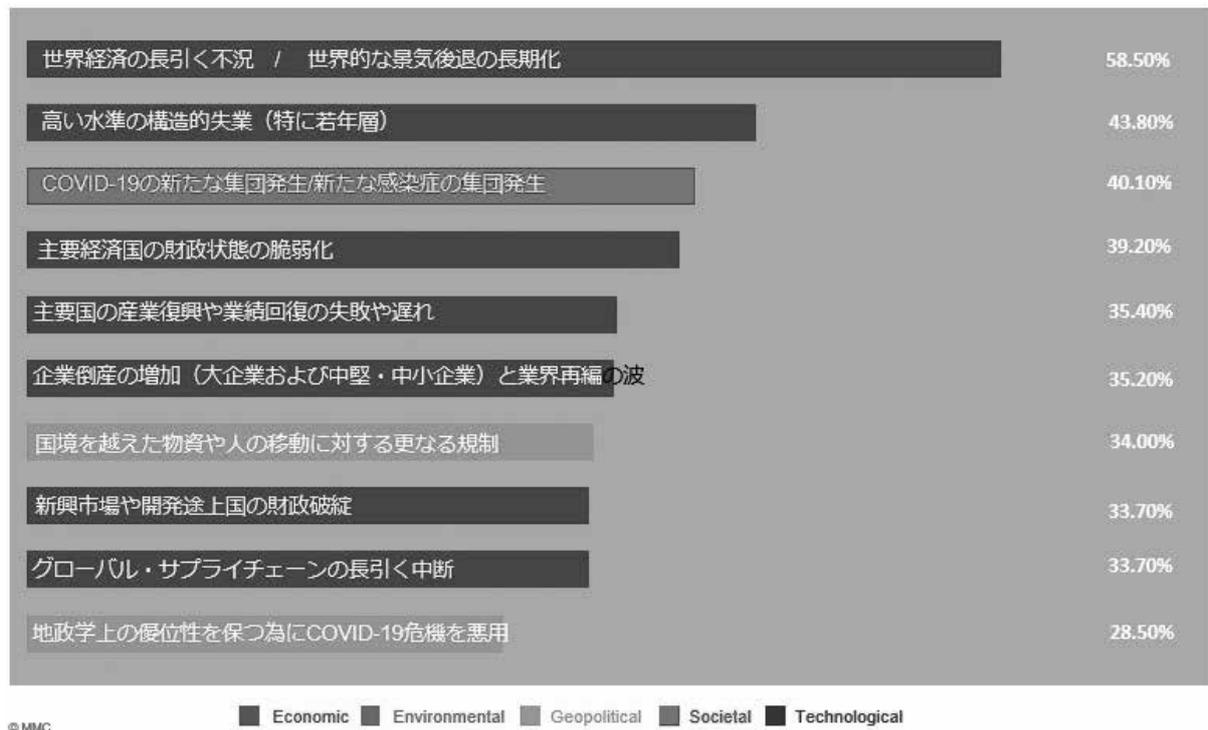


図2 COVID-19（新型コロナウイルス）とリスクの展望 世界中を震撼させる影響度の高いリスク上位10傑



員の福利厚生の見直しも重要です。これらのリスクの因子を摘み取っておかないと、従業員が会社や役員に対して損害賠償を請求してくることもあるかもしれません。さらにはコロナ禍で発生した損害がどこまで現行の保険でカバーされるかはケース・バイ・ケースであるため、しっかりと保険契約の内容を見直すことが大

切です。

コロナ禍で新たなリスクが脚光を浴びる一方、第15回グローバルリスク報告書2020年版で列挙されている30のリスクは現時点でもしっかりと顕在化しています。気候変動（地球の温暖化）を例に取ってみましょう。世界経済を再活性化させる中で、労働・雇用慣行、出

張・旅行、通勤・通学、購買や消費に対する意識の変化は、低炭素でより持続可能な未来を実現するための新たな道筋を示唆しているのかも知れません。リスクは常に変容することを忘れてはいけません。そのことを踏まえて、今年1月に発行されたグローバルリスク報告書について次章で概説します。

## 2. グローバルリスク報告書2020年版

### (1) 環境問題とその背後にある政治的対立

世界経済フォーラムが今年1月に発表した「第15回グローバルリスク報告書2020年版」は政治、経済、学術など各界のトップリーダー750人余りに対するアンケート調査の結果を反映、今後10年間に世界で起こり得るリスクを可能性と影響度で評価しています。毎年1月に開催される世界経済フォーラム年次総会（通称：ダボス会議）の議論に活用されるほか、各国の政府や企業の長期戦略策定にも影響を与えるとされています。

### (2) グローバルリスクの上位5位を環境問題が独占

「今後10年間に発生する可能性が高いリスク」は、報告書が発行されて今回で15回目を迎えますが、今回

は初めて、以下の通り上位5項目を環境関連が占めました。

- ① 異常気象（洪水・暴風など）
- ② 気候変動の緩和や適応の失敗
- ③ 自然災害（地震・津波・火山爆発・地磁気嵐など）
- ④ 生物多様性の喪失と生態系の崩壊
- ⑤ 人為的な環境災害

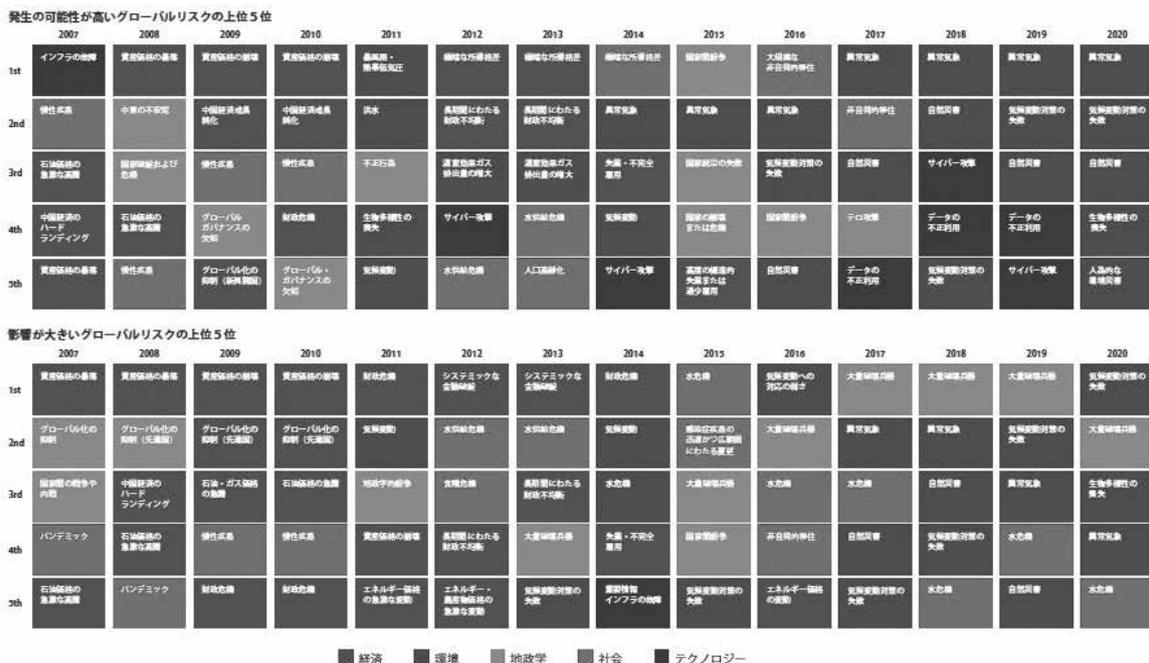
また今後10年間に発生した場合の影響が大きいリスクについても、上位5項目のうち4項目が環境リスクです。

- ① 気候変動の緩和や適応の失敗
- ② 大量破壊兵器
- ③ 生物多様性の喪失と生態系の崩壊
- ④ 異常気象（洪水・暴風など）
- ⑤ 水危機

今年の特徴であります、環境リスクは世界経済にとって相当厳しい影響を与えることが予想されています。起点は環境リスクですが、それが波及することで最終的には経済リスクに行きつくことになり、経済・財政の停滞を余儀なくされることとなります。

地政学的リスクも前年度に続いて憂慮すべきリスクであり、これは大国間の対立や自国主義、それによる多国間協調の後退が環境リスクの引き金となっている、

図3 世界経済フォーラム発行「グローバルリスク報告書2020年版」(マーシュジャパン/マーシュブローカー・ジャパンによる翻訳)



出典：World Economic Forum 2007-2020, Global Risks Reports.  
 注：グローバルリスクの定義と組み合わせは、向こう10年間の対象範囲に新たな問題が発生するとともに変化するため、各年のグローバルリスクを厳密に比較できない場合がある。たとえば、サイバー攻撃、所得格差、失業は、2012年からグローバルリスクとして取り上げられるようになった。また、一部のグローバルリスクは重複しが行われ、水危機と所得格差は、社会リスクとして分類されていたが、2015年と2014年ではそれぞれ再分類された。

あるいは増大させるという視点を欠いてはなりません。そしてこのことが、気候変動をはじめさまざまなグローバルリスクへの対応を阻害します。

気候変動への適応の失敗をはじめ、生物多様性の喪失や自然災害の多発も、それらの発生は人為的要因であることが明らかであり、国家間の駆け引きといったガバナンスの問題も横たわっています。それがリスクの起点をあいまいにし、解決或いはその糸口でさえも作りにくくしています。

### (3) 地政学的対立と自国主義の台頭

グローバルリスクは2017年からその項目を変えずに合計30のリスクが列挙されています。ただし、相互の関係性は大きく変化してきています。たとえば「非自発的移住」は紛争による居住環境の悪化（による難民の発生）がその主なる原因でしたが、今回は海面上昇や熱波、食糧生産の不適化といった要因が加わり増幅しています。地政学的リスクと環境リスクが複雑に絡み合い、互いに足を引っ張り合う「負のスパイラル」に陥ってきています。

リスク同士が関連し、際限なく膨らんでいくところに、今回の報告書は警鐘を鳴らしています。複数の問題を同時に解決するには国内外の分裂・分断を修復する取り組みが必要ですが、それを打ち出している国はなく、まずは自国からという思いが大勢を占めています。様々な国際機関が号令をかけても考えがひとつにまとまらないもどかしい状況が続き、グローバルリスクの解決施策の実行どころか立案すら滞っています。

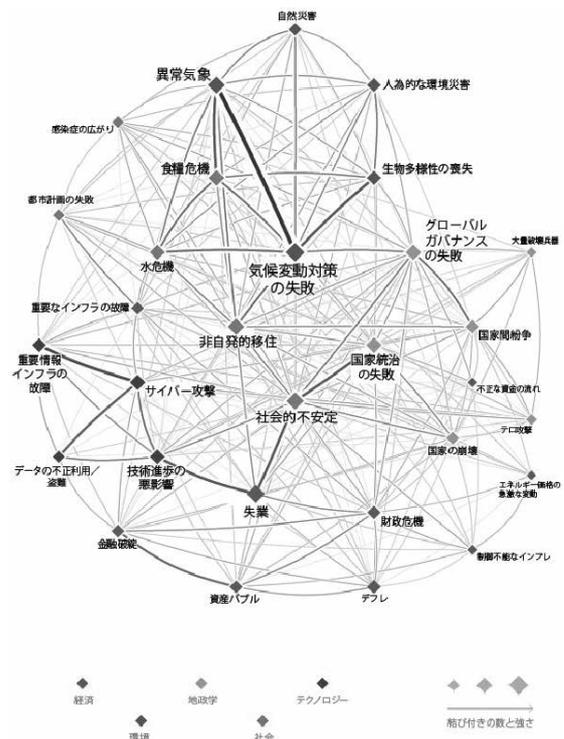
### (4) 若年層リーダーのとらえるリスク

今年の報告書の特徴のひとつとして、今後10年間に発生するリスクの洗い出しに加えて、2020年単年度に増大すると考えられる短期的リスクについても言及しており、世界のトップリーダーは上位に下記のリスクを列挙しています。

- ① 経済対立
- ② 国内政治の二極化
- ③ 異常熱波
- ④ 自然資源の生態系の崩壊
- ⑤ サイバー攻撃：インフラ分野

これらはいずれも経済リスクに直結するものです。ただしこれらのリスクの源を探っていくと、環境リスクが起点になっているリスクも多くあります。短期的な経

図4 世界経済フォーラム発行「グローバルリスク報告書2020年版」(マーシュジャパン/マーシュブローカージャパンによる翻訳)



済リスクの解決を求めるとすれば、結局はそれを呼び込んでいる根底のリスク、すなわち環境リスクに真摯に対応していかなければなりません。そしてそのためには地政学的対立ではなく、多国間協調を図ることが不可欠となっています。

実際、1980年以降に生まれた若年層のリーダーは、長期・短期のいずれの展望においても環境リスクを高く位置付けています。90%近くが「異常熱波」「生物多様性の喪失」「汚染による健康被害」を、2020年さらに悪化するリスクとして列挙しています。将来を強く憂慮する彼らは、従来のビジネスリーダーが取っている政策・対策が手ぬるいと考えています。直近の経済リスクでなく、環境リスクに速度を上げて対応すべきと論じています。

今年の世界経済フォーラムの主テーマは、ステークホルダーがつくる持続可能で結束した世界。利害関係者のすべてが語り合い、一致団結できるかが、環境リスクと地政学的リスクを同時に鎮静化させる近道であり、そのことが結果として経済リスクを抑えることになるでしょう。

#### ■グローバルリスク報告書2020年版

<https://www.marsh-mbj.com/ja/insights/research/global-risks-report-2020.html>